

水害に備え、防災・減災の知識と技術の向上を目指して



下館河川事務所長からスマートフォン(携帯電話)に直接連絡が入り、スピーカー機能を使って、河川の情報をやりとりする稲葉市長(下妻市災害対策本部=下妻市役所本庁舎)

■関係機関トップ同士の「ホットライン訓練」実施

栃木・茨城両県にまたがる鬼怒川と小貝川等を管理する国土交通省関東地方整備局下館河川事務所と市は7月21日、災害時における河川の状況等を電話で直接やりとりする「ホットライン訓練」を実施しました。

災害時に「いつ」「誰が」「何をやるのか」を、あらかじめ時系列で整理した防災行動計画(タイムライン)に沿って行われたこの訓練は、下館河川事務所からファックスによる洪水予報の情報を受けた後、里村所長から稲葉市長の携帯電話に直接連絡が入り、河川の状況をはじめ、沿川住民への避難指示発令の判断材料とするための情報等がやりとりされました。

市では、今後も下館河川事務所と連携を密にしながら、住民の安全・安心の確保に努めていきます。

■消防団員が水防工法の習得に汗

下妻市別府地先の鬼怒川右岸(大形橋下流)の河川敷で7月3日、「第57回鬼怒・小貝水防連合体水防訓練」が行われました。

下妻市、つくば市、常総市、つくばみらい市、八千代町の水防関係者約200人が集まり、出水期にあたり水害に備えようと合同で訓練したのは5つの水防工法。県常総工事事務所と土浦土木事務所の指導のもと、「木流し」「シート張り」「折り返し」「五徳縫い」「積土のう・月の輪」をつくる知識と技術を習得しました。

下妻市消防団からは第1分団10人、第7分団10人の精鋭20人が参加。気温30度を超える猛暑の中、本番さながらの水防工法の作業に汗を流しました。

今回で水防訓練の体験が2回目という第7分団の人見守副分団長は「今回学んだロープの結び方や工法などを他の団員にも伝えていく。水防に関する備品も確認しながら、意識を高めていきたい」と力強く語りました。



長い竹を削り、先端を鋭くして杭状にする「竹とげ」の作業息を合わせて竹を引く下妻市消防団員

地域農業のリーダー役を担う茨城県農業三士 農業経営士と青年農業士が新たに認定

県では、地域農業の振興を図るため、優れた農業者や将来の地域農業の担い手となる農業者を農業三士(農業経営士、女性農業士、青年農業士)として認定しています。

平成28年度の認定式が7月22日、水戸市の茨城県市町村会館で行われ、本市から新たに認定された農業経営士の小竹善和さん(五箇)と青年農業士の倉持昌司さん(大園木)が同日、市役所本庁舎を訪れ、野中副市長に報告しました。

レタスやメロンなどの露地野菜を手掛ける小竹さんは、農業経営士として農業の担い手育成や地域農業の振興を進める地域リーダーの役割を、水稲や麦などを手掛ける倉持さんは、青年農業士として次代を担う農業後継者に新たな目標と励みを与えるとともに農業青年の活動を促進するなどの活躍が期待されています。



左から農業経営士・小竹さんと青年農業士・倉持さん

下妻産タカミメロンをタイ、マレーシアで輸出販売 販路拡大に向けてトップセールス

JA常総ひかりと同JA千代川地区メロン部会、下妻市は7月10日、マレーシアの首都クアラルンプールの量販店で、下妻産タカミメロンのトップセールスを行いました。

塚本治男・同JA組合長や稲葉本治・下妻市長による現地の消費者への試食対面販売では、味の評価は高いものの、一部で価格が高いとの声もあり、コスト対策への課題も見えてきました。

同タカミメロンの輸出事業は2年目の試みで、下妻産のブランド力向上と高品質化を目指し、1ケース5キロのものを船便で輸送。マレーシアへの30ケースは試験販売、タイへの200ケースは現地での品質調査を行い、両国の流通を含む市場調査も行いました。

中里一秀・メロン部会長は「実際に食べてもらい『おいしい』と言われ、うれしかったが、他国産の品質のいいメロンもあった。商品価値を上げ、納得して購入してもらおう取り組みを続けていきたい」と今後の抱負を語りました。

同JAでは、タカミメロンや梨の継続的な輸出で信頼を築き、他品目の青果物についても輸出できるものを増やしていきたいとしており、市も綿密に連携しながらブランド力向上、生産者の生産意欲の向上、産地の活性化につなげていきます。



マレーシアの量販店オーナーに飾りメロンを進呈する稲葉市長(左)



タイの低温倉庫内でメロンの保管状況を確認する海外派遣一行

県内初の光センサー導入で糖度保証「下妻のなし」ブランド力向上へ

県内有数の梨の産地・下妻市。梨の本格的な出荷を目前に、JA常総ひかりが運営する下妻梨第一共同選果場に7月15日、梨の糖度や内部品質を検査する光センサーを備えた選果機が導入され、竣工式が行われました。

梨の選果機への光センサー導入は、県内初の取り組み。糖度の測定に加え、梨をカットしないと分からなかった果肉内部の傷みなども選果時に自動で選別することが可能となり、目視による従来の選果作業に比べ、効率的に出荷できるようになりました。

同JAでは、平成28年産から従来の「秀・優・良」の3段階の規格に、光センサーによる品質保証を加え、一定糖度以上の梨は「秀」の上をいく「特秀」を設定する方針で、ブランド力向上を図っていきます。

下妻市果樹組合連合会の大塚武雄会長は「昭和48年に選果機を導入してから今回で4代目。最新の技術を取り入れ、安全・安心、高品質でブランド力の強化に努め、県の銘柄産地に指定されている『下妻のなし』を消費者に安定供給していきたい」と意欲を見せていました。



新しい選果機の前でテープカットする関係者



光センサーレーンを見学する式典出席の組合員たち